

IMRAKURRIT



RAKKUR



BRITANNIA

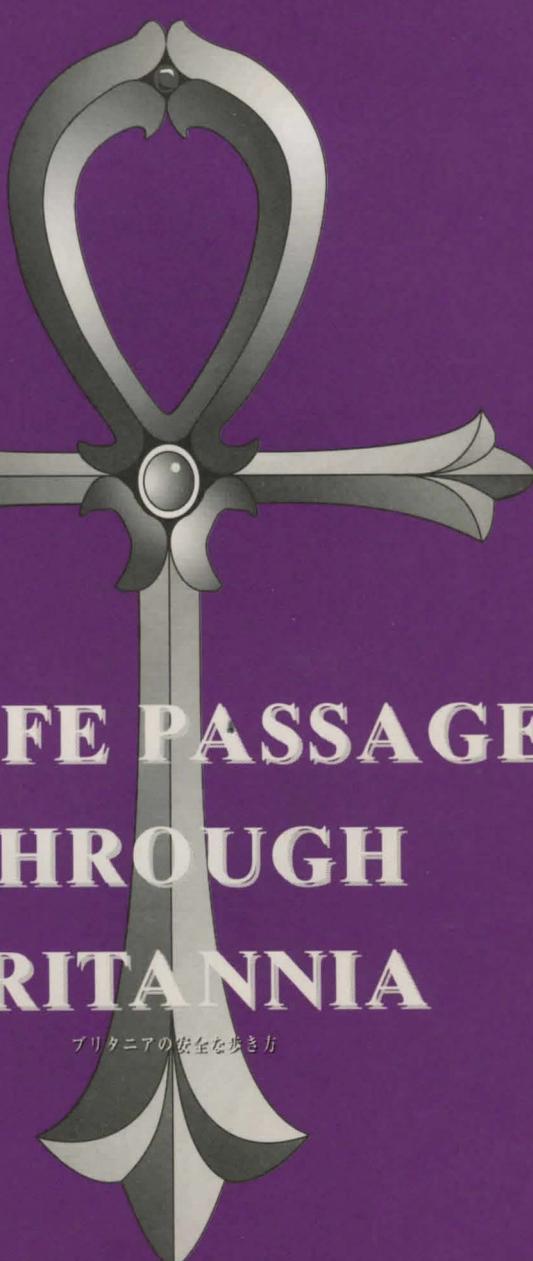


BRITANNIA



A SAFE PASSAGE THROUGH BRITANNIA

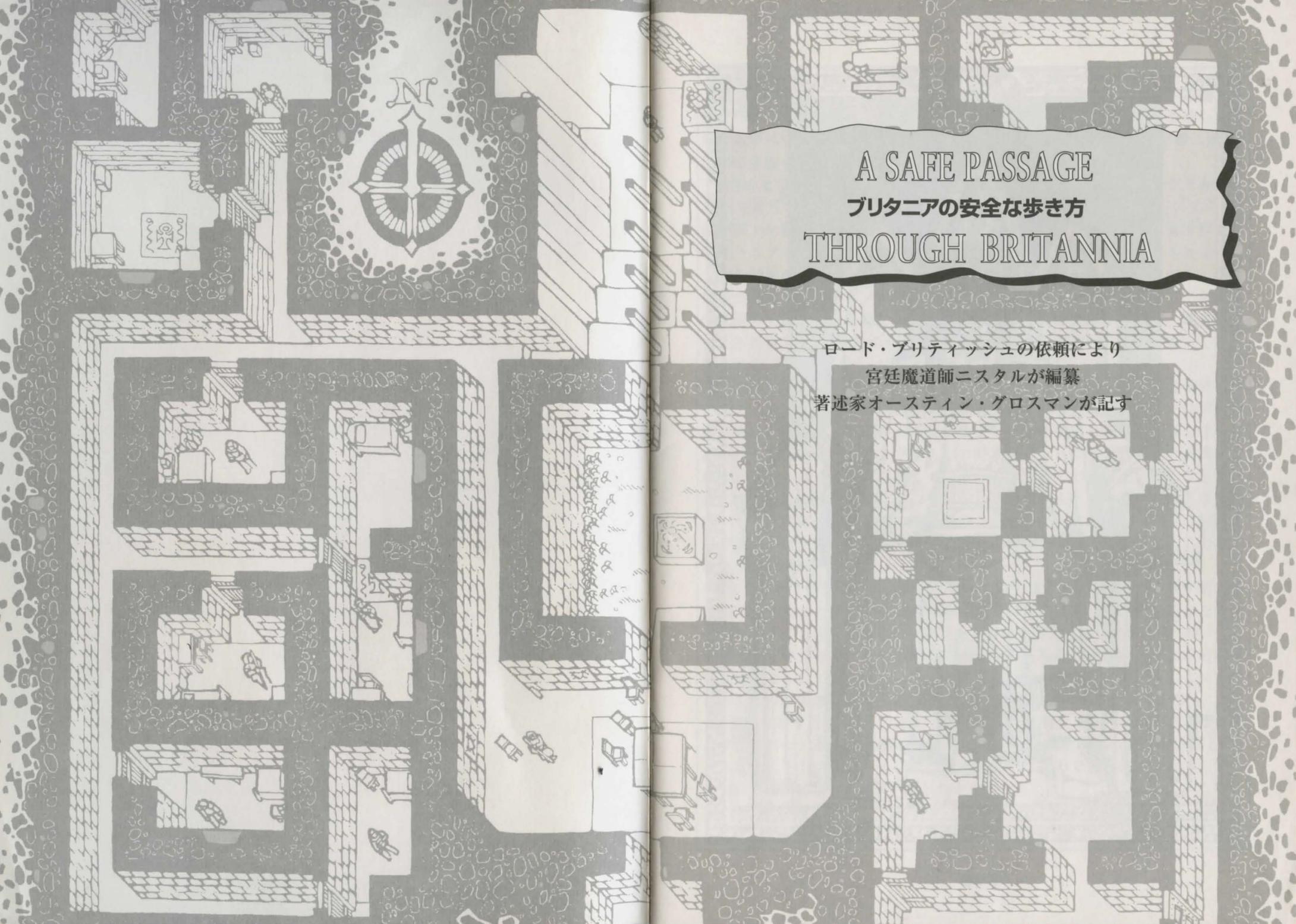
ブリタニアの安全な歩き方



RAKKUR



RAKKUR



A SAFE PASSAGE

ブリタニアの安全な歩き方

THROUGH BRITANNIA

ロード・ブリティッシュの依頼により

宮廷魔道師ニスターが編纂
著述家オースティン・グロスマンが記す



周 知のとおり、今日、我らは再建のための混乱期にある。そこで、余、ロード・ブリティッシュは、『ブリタニアの安全な歩き方』と題する手引き書の作成を提言した。本書は、これから我が世界を旅しようとするすべての者への旅の手引き書であるが、とくに、今日その年齢に達し、初めて各地を冒險しようとする若者に贈るものである。

本書はまず冒頭において、この混乱期に成長し、学校に通うことができなかった若者たちのために、ブリタニアの輝かしくも波乱に満ちた生い立ちと、我が国土を襲った災厄について説明している。諸君はそこから、異世界よりブリタニアを訪れ、幾多の国家的危機を救い、後に聖者アバタールとなったひとりの異邦人の存在を知るであろう。そして、我が国を破壊しつくした異世界の悪魔、ガーディアンの侵略を、危ういところで阻止した、アバタールの最新の記録にも目を通してほしい。さらに、この世界とは別に、数多く存在する異世界について、いかに我々が無知であるかという認識も得てくれればと思う。

冒險家としての道を目指す者は、次に紹介する、我が国の代表的な職業についてよく知っておく必要がある。各職業より得られる肉体的あるいは精神的な技術は、数々の試練に耐えて磨かれ、やがて、咄嗟の危機から身を守る至高の技へと発展させることができるのだ。次に、目に見える世界の裏側に存在する神秘の技について説明している。この神秘の力を自在に操ることができれば、強力な戦闘力になる。しかし、諸君が学ぶべきもっとも重要な事柄は、その次に紹介する8つの徳の理念である。これは、"アバタールの道"とも呼ばれ、世界の平和と、すべての人々への思いやりの心を至上のものとする倫理的原理だ。

最後に本書で紹介するのは、ブリタニアに生息する生物たちだ。我が国には、自然界に生まれた天然の生物のほかに、魔法の力によって生み出された人工の生物も存在する。またそのなかでも、自然な姿で生きているものもあれば、一度死んだ後に姿を変えて活動しているものもある。諸君が賢明なる冒險家を目指すならば、この項にはとくに注意を払い、命を賭けて戦うことにもなるこれらの生物について、正しい知識を身につけておくべきであろう。

本書を編纂するにあたっては、上に紹介した項目に納まりきれぬ豊富な知識と学識を持つ、我が国最高位の魔道師、ニスタルに情報の提供を依頼した。若き旅人に正しい情報と的確な助言を与えることのできる人間は、ニスタルにおいてほかにないと余が判断したからである。



ブリタニアの歴史

ブリタニアの歴史は、一言に語るにはあまりにも長く、あまりにも波乱に満ちている。そこで、これまでにブリタニアを襲った7つの災厄を基準に、我が国の歴史を便宜的に7つの時代に分けて語りたい。現存する記録のなかで、もっとも古いものは、暗黒時代と呼ばれるころのものだ。当時、この世界はソーサリアと呼ばれ、我らのロード・ブリティッシュは、ブリティンと呼ばれる小国の中王にすぎなかった。それは過酷な時代であった。点在する小国は、互いに常に戦争状態にあり、一歩町を離れれば、盗賊や怪物が大手を振って歩き回り、少しでも自分よりも弱い者を見つけて餌食にしていた。悪の3人組がこの世界を襲ったのも、そのときだった。

第一番目の悪は、モンティンという若い魔法使いだった。彼は、当時、優秀な魔法使いとして尊敬を集めていた実の父親を殺害し、父の魔法の宝珠を奪いとった。それがあれば、不死身の体になれるとして蒙ティンは信じていたのだ。彼は、多くの手下を使い、暗黒の王国を築きあげ、ソーサリア全土の支配を要求して、全世界を恐怖の力で絞めつけた。そのとき初めて、当時はまだ異邦人とだけ知られていた現在のアバタールが、ロード・ブリティッシュの召喚にこたえて異世界より救援に現われた。異邦人は期待どおり、モンティンを倒し、ソーサリアに平和を取り戻してくれたのだ。

だが、この平和は長くは続かなかった。モンティンの弟子にして妻であった冷血の魔法使い、ミナックスが反撃に出たのだ。ミナックスは、その強力な影響力によってソーサリアに生息するあらゆる悪性の生物を配下に入れ、またしてもソーサリア全体で破壊を繰り広げた。そこへ再び異邦人が現われた。彼は時間と空間を越えて彼女と戦った末、古代へ彼女を追い詰め、倒したのだ。

ミナックスが倒れたあと、ロード・ブリティッシュの秀でた知性と高潔な徳義心が世界に広く認められ、ソーサリア全体の指導者として迎え入れられることになった。それと時を同じくして、海中より無気味な島が隆起し、またまたソーサリアは恐怖に陥れられた。例によって救援に現われた異邦人は、

ソーサリアの英雄たちと4人でグループを組み、世界を縦横に飛び回り、数々の危険に満ちたダンジョンに潜り、この災厄と戦った。そしてついに、モンディンとミナックスの子にして、機械の姿をした狂気の魔法使い、エクソダスの存在をつきとめ、これを破壊したのだ。

これが悪の3人組の最期だ。人々は、勝利を記念して、この世界の名をソーサリアからブリタニアへと改め、ロード・ブリティッシュを王とする統一国家を樹立したのだ。

ブリタニアに平和と繁栄が続いた。このとき、ロード・ブリティッシュは、完全な人間性を求めて、倫理学の研究に没頭した。そして、ブリタニアを代表する8つの都市に、それぞれひとつずつ、徳義心を祭る神殿を建立し、住民に8つの徳義のひとつを徹底的に追求させた。さらに、8つの徳を構成する3大原理である真実と愛と勇気を研究する施設も建設した。この動きはやがて、聖者アバタールを求めるに至った。8つの徳、3つの大原理といった、いわば抽象的な倫理的概念を体現できる、理想の人格者だ。この要求にこたえたのが、あの異邦人だった。剛健な戦う英雄は修身の英雄となり、8人の仲間を従えて、グレート・スティジアン・アビスの底より、人生の答が記された究極の法典、コデックスを持ち帰ったのだ。

その直後のことだった。ブリタニアは大災害にみまわれた。コデックスを地表に持ち出したことが大地震を引き起こし、大規模な地殻変動を招いて、ブリタニアの地下に非常に大規模な洞窟と空洞が連続した世界"アンダーワールド"を形成した。ロード・ブリティッシュは、さっそく、アンダーワールドの地図を製作するために探検隊を組織し、自ら陣頭に立って地下へ旅立った。だが、そこ待っていたのは、モンディンが父親から奪った不死身の宝珠の破片から生れた、偽り、憎悪、卑怯の3人のシャドーロードだった。ロード・ブリティッシュは彼らに捕まり、地下の牢獄に幽閉されてしまったのだ。ロード・ブリティッシュが姿を消していた間、王の執務をロード・ブラックソーンが代行していたが、彼はシャドーロードに心を操られ、次第に国民を全体主義の圧政で苦しめるようになっていった。このときまた、アバタールが現われ、友人たちの力を借りてブリタニアの危機に立ち向かった。今回は、ブラックソーン体制に対する反逆者という汚名に甘んじながらの活躍だった。しかしやがて、アバタールによって3人のシャドーロードは倒され、ロード・ブリティッシュは救出され、ブラックソーンは追放された。

それから数年間、ブリタニアには平和な時が続いた。ところが、アバタールがアビスからコデックスを持ち帰ったことが、思わぬ事態を引き起こしてしまっているのだった。コデックスを持ち出したことによって発生した地殻変

動は、ブリタニアの反対側の世界に住んでいたガーゴイルという原始的ではあるが非常に文化程度の高い種族の国を破壊してしまったのだ。この事件のことは、ガーゴイルの古代から伝わる予言の書に記されていたのだ。予言には、偽りの予言者が現われ、彼らの神聖なる宝であるコデックスを盗み出し、国土を破壊し、ガーゴイル族を集団虐殺によって絶滅に追いやると記されている。アバタールは、それとは知らずに、コデックスの奪取と、それにともなう地震によって、予言の3分の2までを実行してしまったのだ。ガーゴイルは、なんとしても最後のひとつの予言が現実のものになるのを阻止しようと、ブリタニアに侵攻し、8つの徳の神殿を占拠してしまった。事態の収拾は絶望的と思われたとき、アバタールはガーゴイルの歴史から予言の真実を悟り、卓越した機知と体力をもって、コデックスを人間からもガーゴイルからも同等に閲覧できる環境を作り、人間とガーゴイルを和解させることに成功したのだ。

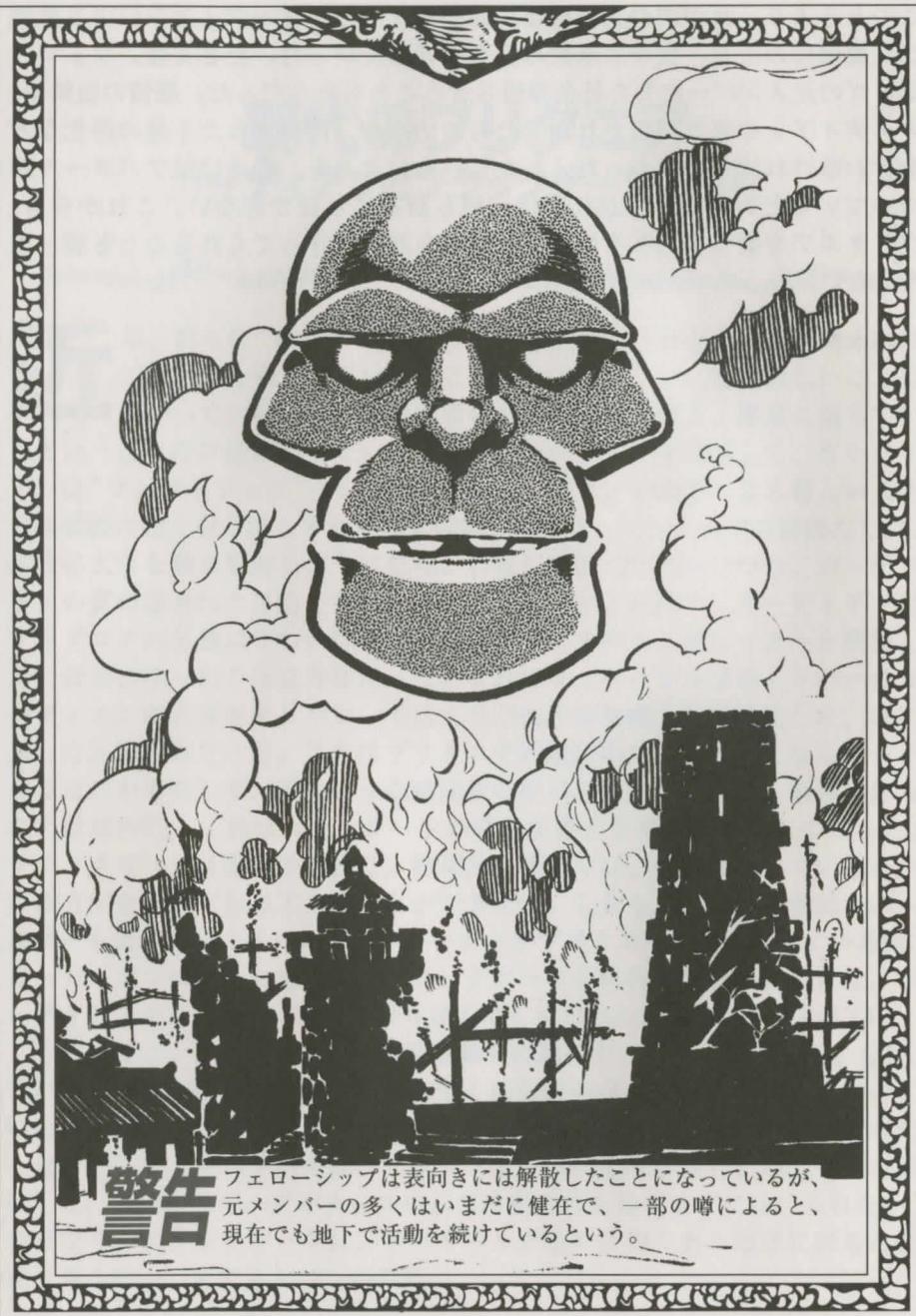
そしてまた平和がしばらく続いた。今度は200年もの間、ブリタニアは平穏だった。この間、アバタールは1度だけブリタニアを訪れている。スラッシャー・ペイルズという異次元の悪魔をこの世界に呼び出そうとした、ある愚かな魔法使いの行為を阻止するためにやってきたのだが、この事実は、あまり知られていない。さすがのアバタールでもスラッシャー・ペイルズを倒すことはできなかったが、かわりにエーテル虚空間へ追放することで事件は解決した。しかし、その反動のために、ブリタニアのグレート・スティジアン・アビスは崩壊し、永遠にその姿を失ったのだ。

現代のブリタニア ガーディアンとブラックゲートの事件

近 年、自らを"ガーディアン"と称する異次元の存在が、目に見えぬ形で我が国を脅かしている。この存在については、まだ詳しいことはわかっていないが、彼は非常に強力な魔法を操り、惡意に満ちているということだけはわかっている。魔法使いバトリンを利用して、ガーディアンは"フェローシップ"という団体を結成し、新しい哲学による新しい人生の価値観の確立を目的とする運動を開始した。フェローシップの幹部たちは、次第に大きな権力を握るようになり、各地で破壊工作を行いつつ、ガーディアンの真の隠された目的を実行していった。これと同時に、ガーディアンはブリタニアの各地に3つの巨大なブラックロックのジェネレーターを構築した。最初に作ったのは立方体だった。これはフェローシップのメンバーにガーディアンの言葉をテレパシーで伝えるための発信機として機能した。次に作った正四面体だった。これはブリタニアの魔法のエネルギーとなるエーテルの流れを遮断して、私のような魔法使いをパニックに陥れた。最後に作ったのは球体だ。これはムーンゲートの機能を停止させるためのものだった。ブラックロックは魔法の物質だ。物理的な手段では、今日知られているいかなる方法を用いても加工することができない。しかも、いかなる魔法のエネルギーも通さない。3つのジェネレーターがブリタニアを混乱させている間、ガーディアンに操られた人々はブラックゲートを建設していた。これは、ガーディアンがこの世界に体ごと乗り込んでくるための、この世界への入口だ。

それまでは、ガーディアンの計画は順調に進んでいるように思えた。もし、アバタールが200年ぶりに戻ってきてくれなければ、我々はすべてを失っていただろう。フェローシップの危険な正体を最初に暴いたのはアバタールだった。そして、アバタールは、ブラックゲートの場所を突き止め、それを破壊した。私はここで、アバタールの崇高な献身性を強調せざるを得ない。なぜなら、ブラックゲートは、アバタールが彼の故郷である地球に戻ることができる唯一の道でもあったからだ。

このときより、我が国の大規模な再建が始まった。ガーディアンによる破壊は広範囲にわたり、我々に無数の仕事を残していった。たとえば、フェローシップの元メンバーたちを社会復帰させることもそうだった。経済の復興や、ガーディアンの毒牙に冒された者たちの治療や、汚染された土地の浄化なども行わなければならなかった。しかし、なによりも、我々にはアバタールがついているという幸運を忘れては、何も語ることはできない。これからも、ブリタニアを襲うであろう幾多の災厄から我々を守ってくれることを願ってやまない。



フェローシップは表向きには解散したことになっているが、元メンバーの多くはいまだに健在で、一部の噂によると、現在でも地下で活動を続いているという。

復興

フェローシップによってもたらされた、社会的、環境的大破壊からの復興は、ブリタニア全土をあげての大事業となった。ロード・ブリティッシュから、ブリタニア議会、各町の一般市民にいたるまで、ブリタニア政府を構成するすべての階層の人たちが、みな汗をかいた。そして各個人は、自らを振り返り、自分はガーディアンの影響をどのように受け、それでどうなったかを反省した。

ガーディアンによる被害は、町によって異なる。なかでも、ニューマジンシアはほとんど被害がなかったが、そのほかの町は、大変な損害を被った。復興がもっとも遅れているのは、バッカニアーズデンだ。全国のいたるところに散らばって活動していた悪党どもが、いっせいにそれぞれの場所から逃げ帰り、またそこで暮らすようになったようだ。1年前から比較すれば、バッカニアーズデンも安全な場所になったが、それでもなお、ブリタニアの盗賊や海賊の吹き溜りであることに変わりはない。

ジェロームもまた血の気の多い町だ。この町のリーダーたちは、なんとかジェローム住民の暴力的な気質をなだめて、ブリタニアの危険地帯の汚名を返上したいと躍起になっている。

コープの住民は幸運だった。慈悲の神殿の管理者ナスター・シャが隠遁生活から戻ってきたのだ。今、彼女は今回もっとも激しい被害を受けたロックレイク地方の復興を手伝っている。

ブリティンでは、フェローシップのメンバーだったパターソン市長が、ブラックゲートが崩壊した後も市長室で執務を続けている。あの時以来、彼はほんとうによく働いてくれている。ブリタニア最大の都市は、彼のリーダーシップのもとに再び繁栄を取り戻した。

職人の町ミノックは、商慣行の見直しによって、活気を取り戻した。バーンサイド市長は、近郊鉱山の労働基準法の改正も、着実に進んでいると報告している。

ムーングロウの人々は、今の時期に、有名な双子の学者のひとりであるネルソンが町を離れていることを残念に思っている。ネルソンは、ロード・ブリティッシュ城に保管されている膨大な数の古い記録書の研究のために、1年間の予定でブリティンに滞在しているのだ。しかし、ムーングロウがライキーム図書館とブリオン天文台を有するブリタニア随一の学問の府であることに変わりはない。将来に大きな夢を抱く科学者や魔法使いの諸君は、ぜひともムーングロウで学問を積んでほしい。

小さな農業の町ポーズでは、フェローシップの崩壊が悲しい結果をもたらしてしまった。貧しい人たちのためにフェリドウインが運営していた救済施設が閉鎖に追い込まれてしまったのだ。しかし、そんな逆境にも負けず、フェリドウインは彼の妻といっしょに額に汗をして働き、救済施設を再開しようと努力している。今度は、フェローシップのメンバーか否かで利用者を区別するようなことはしないという。

これを書き記している今も、我々は、あの忌まわしい事故によって全住民の命が奪われた悲しみの島、スカラブレイの復興を願ってやまない。だが、かつて呪われた島の家に移り住もうとする勇気ある人間は、まだ現われていない。

ブリタニアの指導者たち

ブリタニアは君主国家として設立されたが、設立後間もなく、ロード・ブリティッシュは憲法も含めた政治改革を推し進めた。そして、ブリタニアの8つの町から代表が1人ずつ参加する議会を創設したのだ。以来、今日まで、ブリタニアの行政は、そのほとんどが市長を中心とする地方自治によって支えられ、今では、ロード・ブリティッシュが手を下すことは非常時以外には、ほとんどなくなった。とは言え、8つの徳の精神がブリタニアの政治の基本理念であることには変わりがなく、ロード・ブリティッシュ城では議会が定期的に開かれる。城には、ロード・ブリティッシュの私的な相談役も、多く住んでいる。

ブリタニアの住人なら、すぐに名前を並べることができる重要人物たちがいる。あとで、彼らを簡単に紹介しておこう。フェローシップの崩壊によって、数多くの実力者たちが社会的地位を失った。それが政治の大幅な再編成を促し、ブリタニアのすべての住人は、改めて国的重要人物の名を記憶することになった。彼らのなかには、立派なオフィスを構える者もいれば、気ままに国中を旅して歩いている者もいる。しかし、彼らはみな、過去においてブリタニアに大変な貢献をし、今回の復興においても、新たな未来の構築に大きな力を注いでくれた者ばかりだ。





ロード・ブリティッシュ

最高議会議長。アバタールと同様、地球と呼ばれる世界から渡ってきた。そのため、一般的のブリタニア人よりもずっと寿命が長い。古代ソーサリアの時代から王として国を治めてきたが、その大いなる英知によって、今日ではブリタニアの哲学王として親しまれている。



ロード・ドラクシヌソム

今でもガーゴイル族の名目上の王だが、ブリタニアへの移住を余儀なくされた彼らは、民族的結束を失いつつある。しかし、ガーゴイル族が最大の災厄にみまわれたときに国民を守りぬいた彼の姿を知っている人々から、大きな尊敬を集めている。



サー・デュブレ

つい先頃、ナイトの称号を授与された。エクソダス時代からアバタールの戦友として戦ってきた。頼まれたらイヤと言えない、じつに頼もしい戦士であり、酒飲み仲間でもある。



フェリドワイン

ポーズ出身の、ブリタニア最高の慈善家として知られている。元フェローシップのメンバーだが、貧しい人々のために救済施設を建設するなど、フェローシップの資産を真に社会の役に立てることができた唯一の人間でもある。

ジョフリー

アバタールの修行の旅に同行し、初めてのその優れた戦闘技術を認められた。今日では、ロード・ブリティッシュがもっとも信頼する腹心のひとりであり、城の警備隊長を務めている。



イオロ

モンティンの襲撃のときから、アバタールのよき相棒となっている。彼も、アバタールやロード・ブリティッシュと同じく地球の出身で、このブリタニアで非常に長い人生を送っている。



ジュリア

メカニックの天才として名高い武器職人だ。近年、ブリタニアを襲った危機に立ち向かった勇敢さもさることながら、彼女の気性の荒さも有名だ。



ミランダ

ブリタニア最高議会にたった3人しかいない女性議員のひとり。おそらく、ブリタニアでもっとも進歩的な女性だろう。社会における女性の地位の平等化を強く訴えるかたわら、ブリタニアの環境破壊問題に対しても、特異な活動を行っている。





ネルソン

現在はブリタニアに短期滞在中だが、ムーングロウのライキューム図書館の館長だ。そして、ガーゴイル族のインフォレムと並んで、ブリタニアでもっとも優れた頭脳を持つ学者でもある。



ニスター

小生だ。ロード・ブリティッシュの宮廷魔導師として、恥ずかしながらこの愚老の名を加えさせていただく。



パターソン

ブリタニア最大の都市ブリティンの市長だ。フェローシップの絶大な後援によって市長に選出されたが、市長としての能力が確かであることが認められたため、フェローシップ崩壊後も、市長の職に留まっている。



レディー・トリー

人の心を読む能力を持つ女性だ。サーパンスホールドに住み、常に人々の相談に追われている。

異次元の世界

ガ

ーディアンの異次元からの襲撃を受けた我々は、この世界のほかにも、別の世界があることを知らされた。アバタールやロード・ブリティッシュが、現にムーンゲートを使ってブリタニアと地球と呼ばれる世界を往復していることから、そのような世界が存在することは誰もが知っていたが、今回の事件によって、この多元宇宙には、地球とブリタニアだけではなく、無数に世界が存在することが証明されたのだ。ブリタニアからは、地球がもっとも行きやすい世界になっているが、では、なぜ地球だけがそうなのか。ブリタニアに隣接して、どのような世界が存在するのか、それらはいまだに謎のままだ。

また、地球とブリタニアの間には、出来事や個々の人そのものにいたるまで、単なる偶然では説明がつかないほど類似した点が観察されている。このことから、この2つの世界は並行して存在していると考えることができる。あたかも、ある種の原則、対称性、あるいは関連性といったものが多元宇宙に存在し、それらの元で、複数の異なる世界が結合されているかのごとくに見受けられる。また、その因果律が逆に作用していることもあり得る。つまり、非常に似通った世界同士が、どこかで接触し合うという可能性も考えられるのだ。



徳 義

ブリタニアの社会では、ロード・ブリティッシュが選定し提唱した8つの徳が、もっとも崇高な理念とされている。今日の復興の最大の目標は、徳義心の回復と、さらなる追求にある。ブラックゲートの時代に、ほとんどのブリタニア市民は、徳の道から大きくはずれてしまった。今この時期に大人の仲間入りをする若者たちは、はたして徳の精神を身につけることが可能なのであろうか。それは今後の課題として残されている。そこで、やはりアバタールが模範となって、人々を徳の道に誘導してくれる事を願う。精神と肉体と靈魂の完全な形を求めて、自らの内に潜む悪と、社会の悪の両方と戦いながら達成したアバタールの修行の成果を、再び發揮してもらいたいものだ。

ここで、ごく簡単に8つの徳の説明をしておこう。この短い説明から、少しでも徳の理念が伝われば幸いだ。しかし、ほんとうに徳を理解しようと思えば、紙の上の文字にばかり頼っていてはいけない。それは己の実体験からこそ得られるものなのだ。いかに正確に徳の理念を説明したところで、その成果は、徳の道に従って他人のために尽くす人々の姿を目にした感動に遠く及ぶものではない。

誠実

自分に対して、また他人に対して、真実を尊ぶ気持ちだ。

慈悲

他人の気持ちを察し、相手を理解し感情を共有しようとする精神だ。

武勇

肉体的あるいは精神的危機に直面したときでも、徳を堅持しようとする勇気だ。

正義

人の行動において、何が正しく、何が間違っているかを判断する知恵だ。

献身

己の利益を棄て、他人のことを最重要に思う心だ。

名誉

状況に左右されず、真実をまとうする勇気だ。

靈性

己の内なる存在を理解し、内なる存在同士がひとつになることが愛であると認識する心だ。

謙譲

あらゆる存在の価値を認め、個人的な成功や失敗にとらわれず、それらと自分との位置関係を認識する精神だ。

そして、以上の8つの徳は、"真実"、"愛"、"勇気"の3つの大原則に集約される。

職業

旅 や冒険に出ようとする者は、手に職を持っておくことが望ましい。ここに紹介する専門職の技を磨き追求することで、諸君も専門の技能を身につけることができる。



メイジ

私の同業だ。極限まで魔法の能力を高めようと、常に精進している。知的能力は、魔法を操るうえでは必要不可欠のものだ。また、知力が低いと魔法学の習得は難しく、また、基本的な呪文を組み合わせて、いかに複雑な問題を解決するかといった応用も難しい。

ファイター

戦闘の専門家だ。素手による武道から、剣や斧を使った術、さらには飛び道具にいたるまで、肉体を使ったあらゆる戦闘術の追求にすべてを賭けている。肉体の能力とパワーを極限までに高めた彼ら戦闘技術は、他の者を寄せ付けない。



レンジャー

木と自然にまつわる昔話を好み、ひとり森の中で過ごすことを愛する静かな戦士だ。相手に悟られずに行動する忍びの技や、獲物の足跡を追跡する能力に長けている。自然の中で戦ったなら、非常に恐ろしい敵となる。木製の武器を好んで使用する。



シェパード(羊飼い)

腕っぷしが物を言う自然生活者たちのグループから一步離れ、質素と謙譲を旨として暮らしている。しかし、家畜を守るためにには獰猛な動物に立ち向かうこともあり、外見からは想像もできない力を發揮する。土着の素朴な魔法を扱う者から、戦闘を得意とする者。または、忍びの技や、木製の武器を使った武術を得意とする者など、その専門技能は多岐にわたる。



バード

各地を旅して、奇想天外な武勇伝を集め、歌にして記録している。ときには、バード自らが武勇伝に参加することもある。物語を聞いて歌にするばかりではない。バードはひとりで旅をすることが多いため、護身術に通じ、多少の魔法の心得もある。



ドルイド

自然に対する理解がもっとも深いドルイド教徒は、自然保護が叫ばれている今日、もっとも期待される人々だ。彼らは大袈裟な防具を身につけることを嫌い、武器も、呪文以外は木製の素朴なものを好む。また彼らは、身のまわりにあるものを利用する術に長けている。



パラディン

ファイターに属する特殊なグループだ。彼らも徳の道に従って肉体を使った戦闘術に身を捧げているが、とくに、戦闘では大きな力となる英雄的カリスマを磨くことを信条としている点が、ほかのファイターとは違ったところだ。悪に立ち向かうときの彼らの勇気と忍耐力は、力だけでは勝てない相手を倒すことができる。



ティンカー(鍛冶屋)

鉄を打ち武器を製造するティンカーは、機械に関する知識にも長けている。機械仕掛けの罠の解除や鍵を開ける技に命を助けられることは多い。また、損傷した武器や防具の修理という重要な技術も持つ。



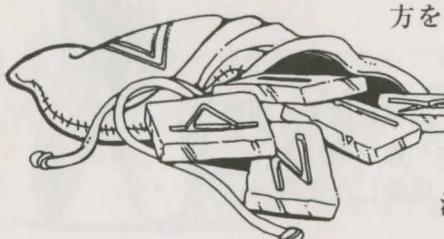
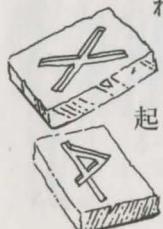
魔 法

ガーディアンの襲撃から立ち直った後、私は、魔法の新しい側面を発見した。ブリタニアで魔法と言えば、秘薬を使用する方法を思い浮かべる人が多いだろうが、最近の研究で私が発見したいつかの驚くべき暗示的要素は、それをくつがえすものだ。

まず第一が、グレート・ステイジアン・アビスで実用化されたルーンを使用する魔法だ。アビスの建設で使用されたと思われる破壊的魔法によって、アビス内部では、ほかの次元との境界が弱くなっていた。そのため、本来ブリタニアで常識とされていた魔法の法則をくつがえす現象が、そこで起こっていたのだと私は推測している。

ルーンを使った魔法では、物質的な秘薬は一切必要なく、呪文を口で唱える必要もない。ルーン方式の基本は、ルーンストーンと呼ばれる24種類のルーン文字を刻んだ小さな石を組み合わせることだ。それぞれのルーンには独自の意味があり、その意味のとおりの特性がある。それらを組み合わせることで、ひとつの呪文が構成され、魔法エネルギーを加えることで、現実世界にさまざまな現象が引き起こされる。

ただし、これには複雑な印を手で結ぶ必要がある。たとえ、ルーンストーンを正しく組み合せたとしても、正しい手の動かし方を知らなければ、思うとおりの結果は得られない。つまり、ルーン方式の魔法では、この手の印をいくつ知っているかが決め手となる。



これまで知られていたブリタニアの魔法とは異質であることなどから、まだルーン方式の魔法から十分な力を引き出すことができないが、アビスのように他次元との境界が弱い地点では、この方式が有利になるかもしれない。しかし、もしそうだとしても、そこでまたルーン方式の魔法の法則が変化しないとも限らない。どの呪文が従来方式に比べて簡単になるのか、あるいは難しくなるのか、そして、今までにない呪文ができるのか、などは予測がつかない。

このほかに、私はまったく新しい魔法の世界を調査しているところだ。ガーディアンを襲ったガーディアンが使用する、独自の法則と限界を持つ非常に強力で大規模な魔法だ。ブリタニアの魔法使いには、あれほどの規模の呪文に必要なだけのマナはとうてい扱えない。しかし、彼の呪文を目撃して、その原理を探ることは、なんとかできそうだ。

我々は、ガーディアンの魔法を3回目撃している。彼がブリタニアに創造したブラックロックの"ジェネレーター"だ。彼は魔法でジェネレーターを作り、それを通じて私たちのこの次元に直接、彼のパワーを送り込むことが可能になった。あれで、彼の本来の目的を途中まで実現したと言うことができるだろう。だが、彼の魔法には特徴がある。彼の魔法には、かならず幾何学的な形をした物体がともなう。しかも、それには小さな相似形の物体も生まれるのだ。このことから、ガーディアンの大規模な魔法には、同じ効果を生む小さな魔法も同時に発生していることがわかる。つまり、たとえば巨大な構造物を創造する魔法を使えば、かならずその中に、その構造物の小型版が生まれるということだ。



生物

ガーディアンがこの世界に及ぼした破壊的な力の影響で、ブリタニアの狂暴な悪性生物たちの活動が、またしても活発化してしまった。これらの生物には、自然界の動物も含まれるが、なかには知性を持つものもあったり、植物から変化したものもあり、人里離れた地域や地下洞窟などに棲みついては、迷いこんだ人々を餌食にする。

ブリタニアの復興の一環として、我々はできるかぎり、知性のある生物には共存のための教育を行い、狂暴な怪物については駆除するよう努めてきた。なかでも、アバタールによるグレート・スティジアン・アビスの探索によって、トロルとゴブリンは比較的知能が高く、洗練された知性的意志疎通が可能であることがわかっている。ここに紹介する生物は、一部は私自身の大系的調査にもとづく報告であるが、大多数は民間伝承や噂の類をもとに構成されている。



コウモリ

空を飛ぶ小型の動物だ。ほとんど目が見えないかわりに、非常に高い声を発して、自分の居所を感知している。魔法が使用されているか否かは定かではない。暗闇の中で活動することを好み、深い森や洞窟などに多く生息する。

コウモリには、大きく分けて2種類が知られている。そのひとつ、洞窟コウモリは、小型で正確も比較的穏和だ。他のものを攻撃するのは、身の危険を感じたときだけに限られる。動きが速いため、こちらから攻撃を加えることは難しいが、体は纖細なので、攻撃が命中すれば、ほぼ一撃で死んでしまうだろう。その攻撃力は、標準的な防具を身につけていれば、

ほとんど脅威にはならないが、群になった場合は、その限りではない。

もうひとつの吸血コウモリは、洞窟コウモリよりも大型で、体色が赤いためにすぐに識別できる。こちらは狂暴な肉食獣で、人間を襲って食うことはよく知られている。頭上から突然襲われることがあるので、コウモリの多い地域では注意が必要だ。



ブラッドワーム

じつに不快な生物だ。最大で1メートルほどにもなる、緑色をした肉食のミミズの仲間だ。一般に地下の空洞に棲むが、ときとして地表に出てくる場合もある。非常に攻撃的で、自分よりも大きな相手でも、それが動くものなら何にでも襲いかかる。攻撃に対しては弱く、簡単に退治することができるが、1匹で何人の人間を殺すほどの強い毒を持つため、いかに剛腕の騎士であろうと、油断をしてはいけない。



デーモン

私たちが住むこの次元の世界には、ときどきデーモンと呼ばれる生物が訪れる。大変な悪意に満ち、高い知性を持つという以外、あまり詳しいことはわかっていない。もっともよく目撲されているのは、"インプ"だろう。エンプとほぼ同じ大きさで、翼を持ち、天の邪鬼なユーモアのセンスもある。しかし、彼らを間近に見たという人は少ないはずだ。なぜなら彼らは、敵を襲う場合にはその上空を旋回しながら、石をなげたり、エネルギーの稲妻をぶつけることが多いからだ。

そのほかには、よく知られたデーモンの種類というものはない。古文書の研究をしていると、ときどきデーモンを召喚した事例などが書かれているが、今ではすっかり見ることができない。"デストロイヤー"と呼ばれるデーモンに関する記述もあるが、残念ながら、文章の内容がほとんど理解できない状態だ。



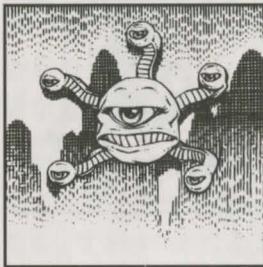
エレメンタル

土、風、火、水の自然の四大要素の化身だ。それ以上のことは、よくわからない。なぜ彼らが生まれたのか、何を目的に生きているのか、かいもく見当がつかない。彼らを怒らせると、非常に大きな破壊力で反撃を受ける。



ゲイザー

多くの目を持つ球体の空中浮遊生物だ。狂気の魔法によって生み出された人工の生物で、地下の環境が非常に適しているのか、繁殖力も非常に強い。彼らが何を食べるのか、知性はあるのか、それらはいまだにわかっていない。なかには魔法を使う個体も目撃されているが、それが後天的に習得されたものなのか、先天的にその能力があるのか、それも定かではない。



幽霊

ブリタニアでは、死人も静かには眠っていない。息を引き取ったあと、すんなりと天国へ昇ることができず、この世に幽霊として留まる者がいる。とくに攻撃的な幽霊は、生きた人間の体温を吸い取ったりもする。それはあたかも、底なしの冷たい世界へ引きずり込まれるような感覚だ。白色をした白幽霊は、比較的簡単に空中に散らすことができるが、黒い怨念の霊や赤い呪いの霊は、なかなかしぶとく、この世への未練を持ち続ける。



大ネズミ

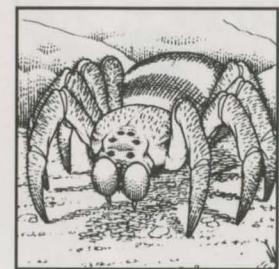
町や村など人の気配のある場所から遠く離れると、ネズミも巨大化し、ネコほどに、ときには犬ほどにも成長する。主に地下に好んで棲み、小動物や、ほかの生物が食べ残したものを見ているが、ときには集団で自分たちよりも大きな獲物を襲うこともある。

大茶ネズミはよく見掛けられるが、地下深くに行くほど、大灰色ネズミの数が増える。この報告をしてくれた騎士は、そのあと、すぐに原因不明の高熱に冒された。おそらく、灰色ネズミに遭遇した際に体の部分を噛まれ、病原菌が感染したものと思われる。



大グモ

地下の世界では、もともと体の小さい種類のクモでも巨大化する傾向にあるようだ。よく見掛けるのは、大灰色グモだ。これは大型犬ほどにまで大きくなる。彼らはよく群れを作り、外敵から身を守るときなどは、協力して戦うことがある。後方の足を使って体を起こし、敵に噛み付くのが彼らの攻撃方法だ。大灰色グモが1匹だけなら勝算はあるが、数匹の群れに襲われたときは、よほど上等な防具で身を固めていない限りは、一目散に逃げるべきだろう。狼グモは小型ながら、牙には非常に強力な毒を持っている。赤っぽい茶色の毛でおおわれているので、すぐに識別できる。また、非常に地下深くには、地獄グモと名付けられた白いクモが存在するという記述をたまに見かけるが、ヒステリックなほどに大袈裟に書かれていることが多く、それを参考に諸君に語ることは、私にはできない。



ゴブリン



ゴブリンは、古代の禁断の魔法によって生み出された生物だ。ブリタニアでは、その後すぐにその手の魔法が全面禁止されている。暗黒時代の後期には、半人半機械のエクソダスが生き残った数少ないゴブリンを繁殖させ、軍隊を組織し、町や村を襲わせた。そして、エクソダスが倒れたあと、ゴブリンたちは人里離れた山地などに逃げ込み、グレイ族とグリーン族の2つの部族に別れて生活するようになった。

アバターの時代になってから、ロード・ブリティッシュは、たとえ"怪物"であろうとも、徳の道を目指す者ならば仲間として受け入れるという寛大な措置をとった。その結果、今日、多くのゴブリンたちが私たちの社会の一員として生活しているのだ。しかし、ほとんどのゴブリンはゴブリン族だけで固まって暮らすことを好む。町から遠く離れた場所を旅しているときにゴブリンに遭遇した場合は、十分に注意が必要だ。なぜなら、そもそもゴブリンは狂暴な種族であり、今でも昔と変わらず野蛮な行為を繰り返す者も少なくないからだ。ゴブリンは1人では一般的な人間よりも力が弱い。それをよく心得ている彼らは、集団で行動することが多い。

ヘッドレス



大きな力を持つ人間か、あるいは自然の気まぐれな悪戯から生まれたような生き物だ。人間にそっくりな体をしているが、首から上がない。いかにしてものを食べるのか、いかにして身のまわりの状況を感知しているのか、まったく謎だ。だが、彼らは非常に優れた感覚を持ち、人間が近くにいるとわかると、相手を殺すまで執拗に攻撃を加える。気の毒な存在だが、大変に狂暴な怪物であり、でき得る限り、接触を避けるべきだろう。

リッチ

自然の死を拒絶した高齢の魔法使いには、死神"リッチ"となる道を選択する者がいる。彼らは、自分の肉体が死んだあとも、朽ちた遺体に魂を宿し、この世に生き続けている。リッチは、かならずと言っていいほど、単独で生活し、魔法の研究を続けている。リッチになれる魔法使いは、そもそも生前、すでに非常に高い知性を持ち、魔法学を極めた者だ。しかし、リッチとして生き続ける彼らのほとんどは、完全に理性が崩壊している。



ラーカー

ラーカーはよく、外界から隔離された湖や地底湖の水面近くを漂い、水面から目と数本の触手をのぞかせ、外敵や獲物を威嚇している。水に入らない限り、ラーカーの攻撃を受けることはまずないが、人が近づくとそれを察知して、跡を追うようについてくる習性がある。水棲生物であるため、水中での戦いとなると、驚くほど巧みな身のこなしを見せる。また、体が大きいため、狭い水路などでは行く手を阻まれる。ラーカーは、死ぬと水中に没するので、そうなればもう心配はない。空気呼吸なのかエラ呼吸なのか、また、体の全体像など、わからない点がまだ多い。



モングバット

素早く、しつこい頭上の狂暴な霊長類だ。厳密には翼を持つ種との中間的な生物で、地下にも地上にも生息している。とくに、山岳地帯の岩場に好んで棲む。彼らにフェアな戦いなど望むべくもない。いきなり頭上から、また目の前を飛びざまに敵を攻撃し、反撃の間を与えずに飛びざるというのが、彼らの攻撃パターンだ。だが、ひとりの人間で十分に対処できる相手でもある。腕自慢の弓術家にとって、手頃な訓練相手だ。サーパンツスパイン山脈の近くに弓術家が多く住んでいるのはそのためだ。



リーパー



魔法によって意識を持つようになった古代の森が、地殻変動によって地下に埋没した際に、突然変異を起こして地下の環境で生き延びることに成功した樹木だと言われている。リーパーは、一言で表現するなら、幹が折れ、葉もない、歩きまわる枯れ木だ。長く伸びた枝は、強大な力によって振り回される。ムチのようなしなやかさがあるため、櫻や松などより強いと言える。魔法を操るリーパーもいるという、未確認の情報もある。

ロットワーム



プラッドワームの親戚だ。腐敗した有機物を餌にしているため、地下でも食糧に困ることはない。近づく動物は、誰かれ構わず攻撃する習性があるが、よく狙って足で蹴ることで、簡単に退治できる。唯一危険と思われるのは、死肉にたかるロットワームの大群に囲まれたときぐらいのものだろう。

スケルトン



なぜ、人の骨が意志を持って歩き、生きている者を襲うのか、その理由は誰にもわからない。死体を操る術に長けた何者かが行っているのだとする説もあるが、その証拠はどこにもない。またほかには、スケルトンは人間の骨などではなく、石などが人間の形になっただけだとする説もある。

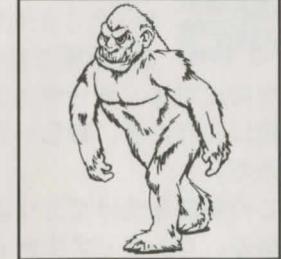
ナメクジ



ほとんど危険性のない生物だ。ただ闇雲に地面を這いまわり、たまたま遭遇したものを探って食う。肉ナメクジは、人間の肌の色をしたゼラチン質の塊だ。ただし、緑色をした毒ナメクジには、多少注意が必要だ。彼らは酸の液を外敵に吐きかける。

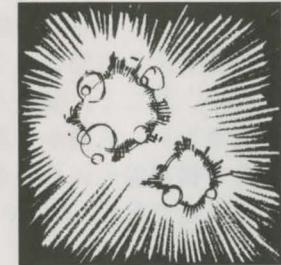
トロル

長い間、怪物として恐れられて嫌われてきたトロルだが、近年になって、高い知性があり、彼らなりの文化を持つトロルの存在も知られるようになった。彼らは人間の言葉を話し、ゆるやかな集団を作つて暮らしている。だが、もちろん無防備な旅人を襲う野蛮なトロルの数も、非常に多い。とくに、ほとんど見ることは稀だが、大トロルには注意が必要だ。一般にトロルは、二足歩行する生物のなかでは最強とされている。

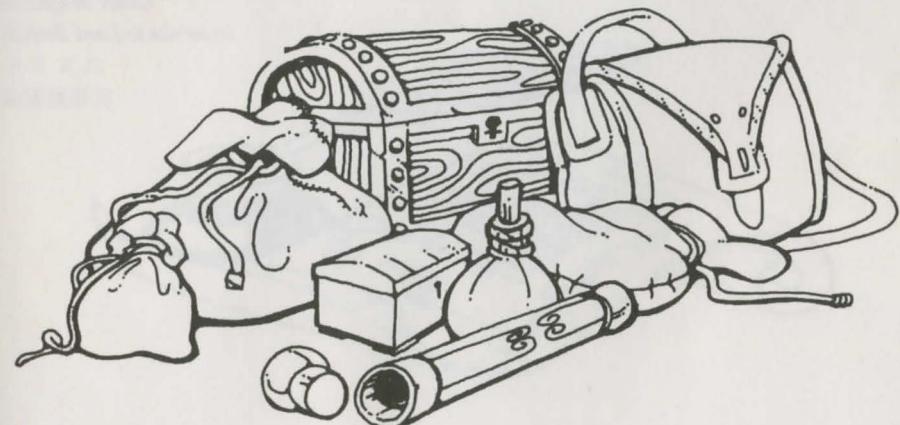


ウィスプ

いかなる攻撃も受け付けず、純粹なエネルギー体のようにも見えるが、その実体はほとんどわかっていない。我々の次元を越えた宇宙の膨大な知識を抱えていると言われている。



一言お断りしておくが、ここに紹介した生物は、ブリタニアの陸や空や水中で、ごく一般的に見られるものに過ぎない。べつの次元からやってきてブリタニアの住人を悩ます怪物もいるとの噂も否定できない現在、まったく未知の生物に遭遇することも、十分に覚悟しておかなければならぬだろう。



結

論として、私はこの書を、こんな慌てた形で終らせるつもりではなかったことを申し上げておきたい。この書を読まれた諸君が、少しでも希望と自信を持ち、ブリタニアの進むべき方向へ歩まれることを切に望む。ガーディアンの破壊行為によって大被害を受けたばかりの我が国は、今こそ、新しい世代の冒険家たちによる探検と再建を待ち望んでいるのだ。

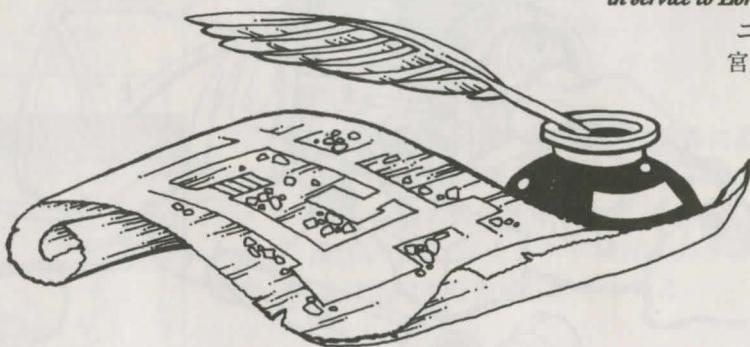
この挑戦を受けて立つ諸君の前には、数えきれないほどの、未発見の世界がある。ロード・ブリティッシュ城の書庫やライキューム図書館では、膨大な参考資料が諸君を待っている。また、まだ誰も入ったことのない土地や、山や、海も、諸君に発見され調査されることを待ち望んでいる。さらに、人一倍の勇気を誇る諸君は、地図にも記されていない古代の地下道や地下水道を探検されるとよい。たしかに、そこには大きな危険があろう。しかし、それにも増して、大きな報酬が得られるはずだ。私は諸君に訴える。どれだけ危険かを考えるのではなく、いまだ誰も見たことのない土地や、いまだ誰も知らない、珍しく、美しく、驚くような物や生物を発見する喜びを想像していただきたい。危険から身を守ることも大切だが、勇気と徳を持って突き進むことで何が得られるかを、つねに心に置いてほしい。諸君の行く手がつねに平らな道であり、諸君の歩みがつねに軽快であらんことを祈る。

ロード・ブリティッシュの
名において編纂す

Mystul

*Court Magician,
in service to Lord British.*

ニスター
宫廷魔導師



©1992, 1995 ORIGIN Systems, Inc.
©1995 Electronic Arts.